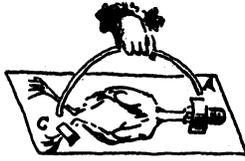


自然現象指示者としての蛙



大後美保

昭和 24 年の冬は暖冬異変でさわがれた。気象台ではこの近年めずらしい暖冬を予想しなかったが、蛙はこれを予想して、いつもの年よりも浅いところで冬眠していた。蛙が浅いところで冬眠しているのを見て、"今年は暖冬だと予想した。気象台の予想よりも私の予想の方がよくあたる"、という人が何人か現われた。

なかには各地の測候所で蛙を飼って、これを観測して長期予報をしてはどうかと、かなりな知識人ちうに本気でいう人さえあった。それでははたして蛙は暖冬を予想したのであろうか。蛙の冬眠の深さを毎年はかった観測資料がないのでこれを否定も肯定もできないが、動物学者の意見をきけば、蛙は冬眠中でも多少移動するし、いつもの年よりも暖かい年には浅いところで冬眠するけいころもあるという。これによると蛙が暖冬を予想して浅いところで冬眠するのではなく、暖いので浅いところで冬眠したとみてよかろう。いままでの暖冬の年をみるとだいたい蛙が冬眠にはいる頃からすでにいつもの年よりも暖かいことが多いので、このようなときにはしぜん浅いところで冬眠することになるわけである。

蛙はある程度、以上温度の高い季節に活躍し、温度の変化に対して案外敏感である。これに関連して三沢勝衛

氏は蛙が霜害を予想するという興味のあることを述べている。蛙は苗代をつくり始める少し前に冬眠からさめ、苗代をつくる頃になるとあちこちで鳴き声がきかれるようになる。ところが日没頃には平常どおり鳴いているのに、20 時か 21 時頃になると急にぱったり鳴きやむことがある。このような時には翌朝霜がおりる。そして蛙の鳴きやむ時刻が早ければ早いほど翌朝の気温の下る程度は大きく、大きな霜害をうけることになる。したがって蛙の鳴きやむ時刻に応じて、苗代の水を深くすれば霜害を完全に防ぐことができるというのである。これは蛙が、一定温度よりさざるとベルが鳴る霜害報知器の役目をはたしているわけである。よく調べてみないとわからないが、ある温度以下に下ると鳴きやむだけのことなら、蛙の鳴き声で霜害を予知するより、霜害報知器を使った方が正確であるということになる。

雨が近づくとアマガエルが鳴きだすということもよくいわれている。これは湿度が高くなるために鳴きだすものようだが、この関係はあまりはっきりしていない。

また蛙が地震を予知するということが筆者は経験したことがある。水田の横にテントを張って徹夜で水田の微気象観測をしていた時のことである。真夜中に、テントの中で横になっていると、突然蛙が一斉にけたたましく鳴き始めた。まるで蛙の大合戦でも始まったようなさざぎである。するとそれから 4~5 秒後にぐらぐらと大地がゆれた。地震が終った時には蛙の鳴き声も平常にもどっていた。蛙もきじと同じように、人間に感じないものを感じるのであろう。なにもそれだからといって人間より蛙の方がまさっているというわけではない。

(中央気象台産業気象課)

書評

マナスル 1952—53 日本山岳会編
A 5 版—228 頁 800 円 毎日新聞社刊

1952年の踏査隊及び1953年の登山隊の記録であるが、これ程詳細にわたった記述は世界にもその例を見ない。その点でヒマラヤ登山に関するあらゆる面を網羅的に知りたいと云う人には最も良い本であろう。計画の発端から、紀行文に進むが隊員各人が分担執筆で良く書いており、又今までと違って翻訳でなく生の日本語である点が非常に身近な親しみを感じさせる。日誌、運行表は極地法登山の組織の方法を知るのに良い。隊員、シェルパ、装備、食糧、気象、植物、動物、人文地誌、原地人の診察、登はんの医学、写真撮影、経費、文献目録等は今までのヒマラヤ文献にはほとんど見受けられなかったものでこのような科学的な面にも重点が置かれていることが特にこの本の特色とも云うべき点であろう。写真は124葉が収録されており、今までのものよりはずっと豊富である。

(大井)

水爆関係 ニュース

日本気象学会では本年5月の総会で水爆実験反対の決議をした(本誌6月号参照)が、それに対しアメリカの原子力委員会から島山理事長宛に8月18日付の次のような公文がとどいた。

“今月初め太平洋で試験された原子爆発に関する5月20日付日本気象学会の声明書がアメリカ気象局から回付されてきました。

御承知のように今年春一連の水爆実験を終りました。試験の結果生ずる公海の放射能は非常に小さいのでビキニとエニウエトク環礁で獲れた魚を食べるのにちっともおそれる理由はありません。又試験で日本や世界の他の部分に放射能をもたらすのを恐れる理由はありません。

原爆が天気におよぼす可能な影響についてはそうとうな研究をしました。その結果直接試験を実施した場所